

組編成のいろいろ

—から浮び上る問題—

村田 修子・安藤哲次郎・竹中京子
佐々木淑子・宮地忠雄・井上季子

組分けの一つの試みと 現状

(同じ年令で年長組と年
少組とを分けた場合)

村田 修子

「幼児の教育」五十三巻十二号にもとりあげられておりますが、「保育をするのに最も適した形」ということについては、保育形態や組編成の方法等問題があることです。これも色々の時代による社会の要求といったこと等や各幼稚園それ自体の職員構成、構造、施設等によつて違つてくることなので、何ともいえないのですが、お茶の水附属幼稚園では昭和二十七年四月入園の幼児から、一つの試みとして、入園してくる同年令の幼児を生年月日順にして二組に分けこの三年間やつてきました。年長の方は各年令とも大体四月から七月位まで、年少の方は八月以後になっていきます。

昭和二十九年度で三才、四才、五才ともそのように分れたわけですが、実のところこう

いうようにはつきり何かを出すということになると三ヶ年位してみただけでは予想していたこととちがうことになったりして、何についても「こうした結果はこうです」という結論のようなものが出ませんので、日常その中にひたつていながら観察したり感じたりしたことをそのまま書いてみることにします。

以前は年令が平均するように組分けすることが多かったのですが、そのときの組のことを考えたり、今の生れ月別に分けられた組をそれぞれ比べてみると、私のもっている年令の少い方の組は、

▽体格が小さくまとまりがない
この年令の半年、一年の差というものは無視することが出来ないものなので、全体的に体格が小さく、それにつれて何といつても気はく、というものが感じられない人の集り、ということをつくづく感じます。色々の生れ月のまざつた組のときは、何か中心になつてすすんでいく力というようなものがあつて、幼い人はその環境の中で生活しているのだから進んでいくことに余り苦勞しないで小さいながらのまとま

り、といったものを感じていましたが、私の今もっている組は、何といても小さい人の集りであるということ強く感じるほど、それぞれがんでに自己中心に生活していてもまとまりというものがなく、年長組になると感じられる組全体の落着きというようなものが、やっと十一月末になって出てきた、という現状です。

しかしこれは年中組、年少組のようすを考えてみると必ずしも小さい組だからとはいきれず、その組を構成している幼児の個性、兄弟関係、大きくは家庭環境というようなものが大変に影響しているので一概にはいえない場合もあるのですが、結局この点では、年令がまざっていた方が子供同志色々の中のひろい経験をする事が出来るといういみでよいのではないか、ということとは強く感じている点です。

体格に伴い健康という面で欠席について比べてみますと、これは割にどちらともいいきれず、それよりその年度により組の傾向として休みの多い組少い組という結果になっているようです。

▽年令的にくっついているのでいろいろの程

度にひらきがない。

これはよい方も都合の悪い方面もあります。

よい方は、お話をきいたりする場合、「そんなのではやさしすぎるとか、むづかしくてあきてしまう」といったようなひらき、というものが比較的少いと感じました。その反面、劇あそび等をする場合、前にいったまとまりというものがなく、恥かしがたり、むやみに騒いだり、ということを経験しました。これもその組の傾向というものがあるので一概にいきれません。

こうして改めて三年間というものをふりかえてみたり、各段階の大きい組小さい組の二組のようすを比べてみると、全体的な傾向としていえる事は前記のようなことだけしか浮んできません。けれど私の組について経験したことをあげてみます。先づ組の構成は三才の時男九人、女八人、幼稚園では手がかかるとか、手をやいてしまう、というのは大體男の子に多いものです。その九人の男の子が一人っ子、末っ子が圧倒的に多かったせい個性がはっきりしていて大體が男のお子さ

んの思い出です。

▽皆それぞれが自分中心に生活しているために、ゆずり合ったりすることが絶対にないで物のとりっことをして衝突することが実に多い。又必要がある場合でも口で解決するというのではなく、先づ手を出すために喧嘩になる。例えば、「あの人と遊びたい」という場合でも、走ってきていきなりドスンとぶつかったり押したりするので、それ方は泣くといった工合になります。

▽つかれるのが早い。これは当然なことですが、遠足等の場合に体力の差というものはとてもはっきりと出てきます。不気嫌になつたり、ねむってしまふ、というのはきまつて小さい人です。

▽すべてに発達がおそいわけですが、面白いと思つたことがあります。それは、毎月一回するお誕生会の時二組一緒におかしをいただきました。よくバタボール等のつるつるした固いあめがつきましたが、それをむいて口に入れる際にポロリと床に落してしまふのはきまつて小さい人でした。大きい方の人には一人もいないのに三人―五人位

は落してしまいました。

▽食事は大体揃っておそく、たべよう、という意欲がなく、従って途中でみなどこかへ散ってしまつて、一人つれてくると誰かがいなくなる、という工合で、食事の時は世話というものはとても大変でした。

▽幼稚園ではお子さんでも幾分よそゆきになるもので、いたづら、といつてもたいしたことはいないのですが、常識では考えられないような経験をしました。

先づ食事のとき、何か用事があつて室をはなれるようなとき、帰つてみると、自分のお湯を他の人のおべんどうの中に注いでしまつたり、お弁当置場について誰かれもかまわずおはしを出してとりかえてしまつたり、小つみ木を室からもち出して男のお手洗の穴の中に入れてしまつたり、実に何もいえず泣きたいようないたづらをよくしました。

こう考えてみますと、この三才という時期は、大きい方、小さい方と分けることは先生の負担というもの、子供の経験の中というものよりも影響が大きいことを感じました。その次の年に男十人、女十一人が新しく

入つてきましたが、その年令では、前の年とは反対に子供が広い経験（知識的なことより特に社会性の面）を得ることが少ない、ということを感じました。

年長組になつてからは、その差というものも段々狭くなつてはきたような感じですが、毎日を見てみますと、遊ぶ友達に大きい組の人を選ぶよりも、年中組の大きい組の人たちとよく遊ぶことも、そこに何かあるのではないと思われます。

することも大体大きい組の人がしたことを順々にあとをおつてしているようです。このように同年令の人達と余り遊ぶことがないので、意識的にそういう機会をもたせるためそれには先づ先生が親しみを持たなくては、ということと、一組が孤立してしまわないためにという気持で組を交換して三日ほどもつてみました。

その結果としては、お茶の水のように一部屋が一幼稚園というたてまえで設けられた形のところではそういう気持はもつていても一部屋で大体の用が足りるため交流する機会が少い。ということを感じました。こういうことも色々方法が考えられることですが、そ

れはさておいて、このように書いてみますと別にかわつたこともなく、子供の発達上の特質ともいふ分りきつたことばかりになつてしまいました。現在の状態からいつて年令別にしたことと特別に困つた点も悪い点も反対に都合のよい点もあがつてきてはいないようです。前にいつたように子供の経験、先生の負担という点からいへば平均されていた方がやり易いということはたしかにいえます。

前にも「その年の傾向その組の傾向」という言葉をつかいましたが、それは私のもつた一番始めの組がとも手がかつたのに反し次の年、更に下の年令の組に於ては必ずしも小さい人の集りの方に手がかかる、ということはいききれない現状にあるからです。

（お茶の水大附属幼稚園）

時差通園教育について

（二部制保育）

安藤哲次郎

特権階級と称する一部の人たち少教の幼児